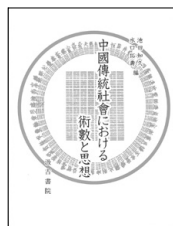


新たな術数研究へのファンファーレ

池田知久・水口拓寿編
中国伝統社会における
術数と思想

堀池 信夫



A5判 274頁
汲古書院
[本体8000円+税]

伝統中国における思想的概念には定義の難しいものが多く、本書のテーマ「術数」もその例にもれない。

「術数」は、『漢書』『芸文志』においてはじめて一つのジャンルとして立てられたものであるが、それ以後、術数と称された諸事象のほとんどは呪術的なものであった。だから今日の我々の知性にとつては、まともに向かい合いくらい対象である。だが、それは近代直前まで東アジア世界の文化的背景として機能しつづけてきたものである。近代化論によって一掃できるものかどうか。そういう歴史的事情によって術数は知の対象から外されてはならぬものとしてある。

加えて術数には「それ自体」に、知の対象として成立しうる根拠がある。大雑把に言って、「数」とは数理・法則、「術」とは技術・テクノロジーである。であれば「数」の方が「術」

よりも基層的である。基層たる数理は古今東西、真理として高度の正当性を備えるものとされ、人間が真理としてもつともとらえやすいものであった。だが数理自体は抽象的なものでしかない。だから数理の真理性（数理が真理であること）は、それが物理として現象するときに最強となる。『漢書』以降、数理の真理性は音響・暦法の物理によって保証されてきた（「律曆思想」という。術数の一分野である）。

音響と暦法は今日においても真理としての質が高く、とりわけ音響の数理は、宇宙が物質で構成されているかぎり、物質の振動のレゾナンスの比率数理として、絶対的である。

音響の数理はすでに戦国時代から知られていたが、律曆思想では音響数理が天文暦数を基礎づけるとされた。これ以降、伝統中国では音響と天文数理の真理性を基底に、多くの学的

事象が真理と認識されてきた。儒教が思想史の中央通路たりえたのは、それが真理であったからであり、その真理性は律暦によって担保されていたのである。

しかし数理は抽象性をもつがゆえに、異義を派生しやすい。それは寛緩的に拡大増殖する。律暦の数理的真理性を説く『漢書』ですらも、それ以前からの呪術的術数を継承し抱えこんでいた。そしてその後の術数は、經典『易』の数理や陰陽五行その他もろもろの術や数を巻きこんでの展開となる。伝統中国はそうした術数で満ち溢れていた。それは伝統中国の大きな精神世界の形成基盤となるものであった。

本書はそうした術数に対して、最先端の研究者たちが、研ぎ澄まされた知性をもって正面から向き合ったドキュメントである。

冒頭に池田知久「始めに」が置かれる。やっかいな「術数」概念の手際よい解説にはじまり、術数の研究史、新出土資料の影響などが簡潔に説明され、ついで収載論文の著者たちの紹介、論文内容の要略が示される。本書の意義を的確に述べる鮮やかな序文である。

第一論文の李零「数術革命を語る——亀卜・筮占から式法・選択へ——」は、著者によって「数術革命」と命名された術数史上の革命的転換、すなわち古代亀卜的術数から戦国秦漢

期の天文歴算的術数の興隆へという大きな見通しを論証しようとする。論証のための四つのパラメータ「占い」「数」「図」「書」において、いずれもが戦国・秦漢期において変化を示す。一般的に戦国中期ごろに文化的転換があったのは確かなので、術数でもそうだったということになる。注目すべきは、四パラメータの論証が、新出土文献（と出土器物）があったればこそ可能となっていたという点である。方法的・史料論的に、古代術数研究の最前線にあるものといえるだろう。

工藤元男「群県少吏と術数——「日書」からみえてきたもの——」は、出土文献日書研究における草創的開拓者かつ世界的な先端研究者である著者が、今日における日書の歴史的・史料的意义を、再び思索し確認する。問題は睡虎地秦簡「語書」に示されている秦朝の支配拡張にともない、在地社会由来の習俗が法治支配によって席卷されてゆくという事態である。征服者の実定法が被征服者の自然法社会を秩序化してゆくという問題系である。日書は基本的に後者の自然法社会を反映するが、それは群県制の地方少吏墓への副葬が多い。これは少吏たちが秦朝支配のもとで在地の自然法の習俗社会を法治社会へと改革してゆくという実務執行上（移風易俗）、日書を必要していたことを反映する。日書は郡県制の官僚制の現実を動態的にとどめている、重要な史料なのである。

第三論文、平沢歩「王莽「秦群神為五部兆」の構造——劉歆三統理論との類似について——」は、漢代術数論のエース劉歆の三統思想の射程の広がりをも主題とする。三統思想は律暦を柱とし、律暦は儒教的学術の基底を形成しているが、本論は加えてその国家祭祀への適用問題を論ずる。劉歆の三統理論の根幹には「元—三・五」という数理構造が存在するが、王莽が上奏した「秦群神為五部兆」の祭祀構造にもそれがみられる。したがってそれによって三統思想の拡張が確認できるとする。清新な眺望を示す論文である。

つぎに武田時昌「六不治と四難——中国医学パラダイムの術数学的考察——」は、古代から近世に至る大きな展望のもとに中国医学の推移展開を解析する、雄渾な論文である。遠古、医は巫であった。そうした巫呪の闇の中から経験という微光をたよりに医薬学が成立してくる。その時、扁鵲「六不治」中の「巫を信じて医を信ぜず」、郭玉「四難」中の「自用して医に仕えず」の二フレーズを非とすることは、巫術から医学を切り分ける大指針となった。とはいえ巫術はそう簡単に退場しない。巫医同在しつつも、医学は技術を磨き上げて対症療法としては世界的先進的な水準に到達する。さまざまの特効薬も開発されたし（金属系劇薬には特効的効能をもつものがあつた）、神技妙薬には言葉にはできない会得領域があると

いう独自の医文化の様式も展開した。波浪は揺動しつつ近代目前に至ったのである。

第五論文の川原秀城「術数三論——朱子学は術数学か——」は、スピノザ的靈感のもと幾何学的思考法を武器に、朱子学の理論的基底に存在する術数性とその問題点を論ずる。「術数」の二つの定義（科学的・歴史的）とそこから導かれる命題を論理的前提に、いくつかの実例の検討による証明である。朱子学を同じく術数ととらえても、肯定派（朝鮮・黄胤錫）と否定派（清・阮元）に分かれること。形而上学的命題（無極而太極）と自然学的命題（水火木金土）の直線的共在の葛藤と緊張。『易経』解釈において朱子学者は倫理的立場をとるが、『易経』の基層に存在する術数性と矛盾すること。蔡元定の合理化された音律理論の本原に経験則に反する律管候気法が据えられていること、等々。哲学体系は体系内の一命題の破綻から崩壊するものだが、朱子学の深奥に存在する術数性はその体系性を無にする起因となつていくとする。論理の切れと洞察性に満ちた論文である。

第六論文、水口拓寿「明清時代の風水文献に現れる「水質」論について」は、近世術数思想の王道たる風水、しかも「水」の思想が主題である。大地中の気の流れの場である龍脈から、地気が「水」として奔出・分流して行く経路が河川・井泉で

ある。本論はその河川・井泉の「水」の良否吉凶の判断のありようの、明清間の展開を追跡する。それは論理的な水質論『博山篇』と環境論的『玉髓真経』とを古典的カノンとして、両書の主張の間を揺動しつつの展開であった。明嘉靖期の『地理人子須知』は『玉髓』系、崇禎期の『地理大全』はやや『博山』系、同時期の『新著地理独啓玄関』は『博山』系で水質問題を風土論から国家論にまで拡張する。清康熙年間中期の『山法全書』は『博山』系、康熙年間後期の『地学』は『博山』と『玉髓』の交錯系、そして道光年間の『地理或問』は『博山』と『玉髓』をそれぞれに収斂するものとなっている。著者によると、こうした「水」論の展開は、近代的知性とは異なる知の筋道（術数的思维）の内発的發展であった。資料を緻密に読み解き、もうひとつの知のあり方を開示する好論である。

第七論文は近藤浩之「周縁文化より考える占卜の技術と文化」である。中央の古い文化が周縁地域にはおそくまで残存するという仮定のもと、中国先秦の亀卜が江戸期の獣骨卜に流入残存していたとみる。そしてその獣骨卜の再現により、中国古代文化のよすがをみようとする。論は中国古代の占卜の様相を、使用する亀や獣骨の種類、灼いた割れ筋の読み方等々、きわめて具体的細緻に追う。ひるがえって日本の占卜に関し、弥生時代以来の骨卜文化が古墳時代の亀甲卜に移行

したのは殷代文化のおそい影響であるとみる。そしてそれとともに亀甲加工技術も進化し、たとえば卜占結果をより綺麗に出すための微妙な切削加工などもおこなわれた。こうした技術を掘り起こし記録したのは、五山の禅僧桃源瑞仙『史記抄』、幕末の国学者伴信友『正卜考』などであった。著者はこれらの全体を見わたして、日本古来の占卜文化は遠く仰韶文化・竜山文化から夏・殷に至る中央の文化が、周縁において反映されて独自の転変をへたものだったとみる。超巨大な歴史的スパンからの文化移動論であるが、その論証は亀甲の穴あけ技術などの極微細な事実によっている。真実は細部に宿る。想像力がぐつぐつと煮えたぎって刺激される論文である。

最後は共編者水口拓寿の「終わりに」である。普通の書本文とことなり、ここで語られるのは未来の術数研究に向けて必須的に考えるべき事項である。「術数」のきちんとした定義づけ、出土占卜資料と伝世占卜資料とのなめらかな連接、儒教や道教などの主流思想との交渉、二十世紀の術数研究不振を踏まえての今後の展望、等々。この文章は「終わりに」というよりも、ここから始まる新しい研究世界への序曲、あるいは「はじまり」のファンファーレである。

（ほりいけ・のぶお 筑波大学名誉教授）